

連載

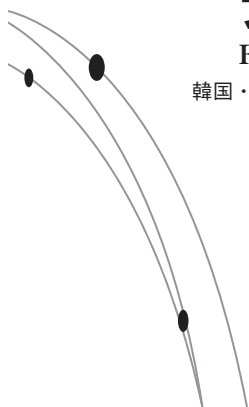
フィールド・アイ

Field Eye

韓国・シンガポール・中国から——②

茨城大学 笹野美佐恵

Misae Sasano



アジア3都市における成人への移行の袋小路

——「完璧な設計図」のなかで立ち止まるシンガポールの若者たち

1 はじめに

シンガポールの街を歩けば、どこでも「ホーカーセンター」と呼ばれるフードコートに出会う。一歩足を踏み入れれば、シンガポールチキンライスの湯気の向こうからインド系カレーのスパイスが香り、マレー系の色鮮やかなデザートが目をはひく。多民族が交差するこの光景は、一見、多様性の自然な調和に見える。だが、ゴミ1つ落ちていない街の潔癖なまでの美しさに触れるたび、この秩序は決して偶然の産物ではないことに気づかされる。

夜、女性が1人で街を歩いていても不安を感じることはない。生活に慣れるにつれ、その「安心」は、制度が細部にまで行き渡っている「管理された」ものだと実感するようになった。国家が用意したレールの上で、人々が規律に沿って暮らしている。それがシンガポールという「都市国家」のかたちだ。

本稿では韓国編に続き、この国を「学校→就業→家族形成」という「成人への移行」の視点から捉え直してみたい。制度が精密に設計された社会では、スムーズな移行が可能なのだろうか。

2 就学——公平な選別と、早期化する競争

シンガポールを象徴する言葉は「メリトクラシー（能力主義）」だ。人口わずか600万人のこの国では、人材こそが資源であり、国家が能力を公平に見極め、教育・職業ルートへ選抜・配分することへの社会的合

意が広く共有されている。透明な制度への信頼が、人々の生活の基盤となっている。

ただし、人生の分岐点は驚くほど早い。12歳、すなわち小学校6年生時の全国試験（PSLE）で、その後の進路が大きく分かれる。一見、過酷なエリート養成に見えるが、その特徴は「弱者の切り捨て」ではない。国家が「透明な選抜」を行う一方で、医療や職業訓練、公営住宅（HDB）といった重層的セーフティネットが、どのルートを歩む者にも一定の生活水準を保障する。この安全網を伴う社会契約があるからこそ、人々は制度を信頼し、規律に従うのであろう。

だが、この予測可能性が高い制度こそが、別の歪みを生んでいる。進路が早期に分岐し、その後の人生経路がある程度見えてしまうからこそ、親たちは子どもの人生という「地図」を少しでも有利に描こうと、幼少期からの全力投球を余儀なくされる。シンガポールの教育競争は、韓国のような長期戦というより、国家のタイムラインから遅れないための早期戦略と管理が中心だ。

この熾烈な選別を支える心理的背景にあるのが、シンガポールの国民性を象徴する「キアス（Kiasu：負けたくない、損をしたくない）」という精神だ。国家が敷いたレールから外れ、将来の選択肢を損なうことへの根源的な忌避感が、競争を底支えている。

ここで重要なのが、競争を支える家庭内の母親役割である。中産階級以上の家庭では「住み込みヘルパー」により家事やケア労働が外部化され、共働きが成り立ちやすい。しかし、子どもの成績管理や進路選択といった「教育マネジメント」は外注できず、母親の肩に重くのしかかる。ここに、制度が整った社会においてもなお、家族内部に残るジェンダー化された負担が見えてくる。

3 就業——精密な配分と分岐の先にある「入口」

教育段階での分岐は、そのまま就業の「入口」の差として現れる。どのルートを歩み、どの職域に接続するかが、その後の賃金や安定、生活設計につながる。

日本では、新卒一括採用制度のもと、卒業年度の景気状況に左右されつつも、「将来性」という数値化できない評価も含めて採用や配置が行われる。そこには、ある種のやり直しや余白が許容される面もある。だがシンガポールでは、進学ルートの違いが早くから可視化され、どのルートに進むかによって初職の職種

やその後の見通しが本人にも見えやすい¹⁾。私がシンガポールで出会った人々は、口を揃えて「ルールが透明だ」と語っていた。

だが、その見通しのよさは、若者に安心だけでなく「合理的な慎重さ」ももたらす。努力は「未知の可能性を切り拓くもの」というより、計算可能な投資になりやすい。ルールが明確な社会では、公正さが担保される一方で、若者には「失敗できない」という感覚が植えつけられる。努力に対する報酬が計算可能であるからこそ、若者たちは「正解」とされるレールから外れることを恐れるようになる。自らのキャリアを「損をしないように（キアス）」「脱落しないように」管理する準備負荷が、日常の底に沈殿している。

だからこそ、結婚や出産といった次の移行の局面で、彼らの足取りは慎重になる。恋愛や結婚、出産といった選択は、キャリアのように明確なリターンが見通せないからだ。こうした制度環境のもとで培われた教育と就業における最適化への努力は、家族形成においては前進の推進力というより、慎重さの増幅装置として働く。

4 家族形成——受容と行動のあいだにある「足踏み」

成人への移行の最終段階である「家族形成」において、この国の目詰まりはより顕著になる。シンガポールでは「結婚を望まない人」が増えたというより、「結婚したいのに、踏み出せない」状況が広がっている。2021年の政府調査によれば²⁾、若年未婚者の8割が結婚意思を示しており、子どもを望む声も77%にのぼる。一方で、未婚者の約50%は現在交際しておらず、そのうち38%は「これまで一度も交際経験がない」という。家族形成を望む声は多いにもかかわらず、具体的な行動が伴わない。なぜこれほどまでに、踏み出せないのか。ここに、いわば「受容性と行動のギャップ (Receptivity-Action Gap)」という深刻な袋小路が見えてくる。

進学・就業・キャリアの成功条件が見えやすい社会では、若者はまずその条件を整えることに全力を注ぐ。その結果、不確実な要素に満ちた「恋愛」は後回しにされやすい。ここでも「失敗して損をしたくない」というキアス的な慎重さが、パートナー選びのハードルを上げているといえよう。

シンガポールでは「BTO（新築公営住宅）を一緒

に申し込もう」という言葉が、プロポーズの比喩として語られる。結婚を予定するカップルや既婚カップルには若いうちから申請可能な制度や補助がある一方で、単身者は原則として35歳になるまで公営住宅取得の選択肢が大きく制限される。住宅価格が高騰し続けるこの国では、早期の結婚と住宅取得こそが、資産形成において相対的に有利となる。住宅政策が結婚という制度に埋め込まれており、結婚はロマンチックなイベント以上に、生活設計のための強力なインセンティブとなっている。早く決めるほど有利であるにもかかわらず、だからこそ若者は「条件の揃った相手と、失敗のない選択を」と慎重になり、足踏みが長引く。

さらに、高学歴化した女性たちにとって、自身に見合う条件を備えた男性を見出すのは容易ではない。そうした傾向の一端は、婚姻の外延が国外へも広がっていることにも表れている。市民婚の約4分の1が非居住者との婚姻であり、その多くはシンガポール市民の夫と非居住者の妻の組み合わせである。この事実、国内の結婚市場におけるマッチングの難しさの一端を示している。

5 結び——過剰適応の果ての袋小路

韓国が「社会全体がスベック競争を増幅する社会」ならば、シンガポールは「国家戦略が人生を配分する社会」である。正解とされるルートが明確に提示されているからこそ、そこから外れないための「過剰適応」は生存戦略として必須となる。

では、人口規模が桁違いで、国家制度が競争の出発点そのものを規定する大国・中国において、若者たちはどのような袋小路に直面しているのだろうか。今回は北京の現場から、成人への移行の最前線を報告したい。

1) PSLE後の中等教育は近年、科目別に履修レベルを選べる制度へ移行し (Full Subject-Based Banding)、柔軟化が図られている。しかし、早期に能力が可視化され、その後のルートが制度化されているという構造の本質には変わりはない。〔出所〕シンガポール教育省 (MOE) 『Education Statistics Digest 2025』 Key Educational Indicators および MOE 公式発表。

2) National Population and Talent Division (2022) 2021 Marriage and Parenthood Survey Report, Prime Minister's Office, Singapore.

ささの・みさえ 茨城大学人文社会科学部講師。主な論文に “Diversity in Transitions to Adulthood: Role Structures and Gender Role Attitudes among Youth across Seven Countries,” *Journal of Asian Sociology*, Vol. 53, No. 4, pp. 421-447 (2024 年) など。家族社会学、人口学、ジェンダー研究専攻。